

# 我が国産業における人材力強化に向けた研究会 中核人材の確保・活用促進に向けた検討ワーキング・グループ（第4回）

## 議事概要

- 日時：平成30年1月18日（木）
- 場所：経済産業省本館17階第1特別会議室
- テーマ：中間とりまとめ（骨子案）
- 概要

○このスキームが、それぞれミスマッチが高いとか、低いというのはちょっと危険だと思う。コーディネーターや携わる個人の能力等によるところが大きい。

『期間/コスト』についても、対象となる人数や募集する人材の希少性等によって変わる。必ずしもスキームによるものではない。

Ⅲ. 政府の取り組むべき方向性にある(1)②中小企業の魅力発信強化について、改めて情報を集めるよりも、上手に編集加工することが必要である。情報は溢れており、既にあるものを上手に使う方向で検討すべきか。

○各スキームの特徴を表現したいのならば、各スキームにおける対象者の特徴や、スキームを活用している中小企業の特徴などを表現するのがよい。一律にリスクや期間、コスト等を表現できるものではない。

○中小企業が「このスキームなら自社でもやってみたい」となればよい。課題対応策のパターンの一つとして、スキームを整理できればよいのではないか。

○この議論の最終着地をどうするか。中小企業と大企業のミドル人材の情報の非対称性は、それぞれを個別に支援すれば問題は解消するのか。あるいは、コーディネート機能の必要性や兼業副業などの流れを世に認知させるべきなのか。本WGではどちらのメッセージを発信するのか。

○方向感として、需要側と供給側をサポートすればよいとは思っていない。方向性は後者であり、中間支援をおこなうコーディネート機能が必要なのだろう。

○4つのステップは現実的で良いと感じる。持続可能でスケールするスキームの検討をする際に、行政に過度な期待をするべきではない。行政官は定期異動するため、持続可能にならない可能性が高い。地方中小企業の求人情報の質や見せ方には工夫が必要。雇用条件だけでは仕事の魅力は埋もれてしまう。個別のマッチングをする際には、実際の仕事内容や経営者の志、地域住民との関係性などを魅力としてアピールすることが効果的。

○中間支援機構はカスタマイズ型であるが、そのカスタマイズの在り方を構造化し

たり体系化することが必要か。市場化できるようなものではなく、カスタマイズ型のマッチングになる。個々の想いをセットでマッチングする必要がある。

○別の意味で市場性は必要である。中小企業の場合、自分の会社内だけで盛り上がっている場合があり、自社の魅力や実態を市場に晒すことは必要。人材側としても、自分のキャリアとしての価値を高めるという意味での市場性は必要である。

○行政はオペレーションができないが、上手なプラットフォーム作りはできる。行政の役割として、どう絡んだ場合に役立つのか、どういうモデルが成り立つのかは要検討か。

○地方では、誰が紹介してくれるのかによって対応が異なることが多い。特に行政機関からの紹介は地元の信頼関係があるので経営者の本音が引き出しやすい。

○仲介機能のモデルを考えたとき、行政の関与の仕方はどうあるべきかということは考えるべき。

○中小企業が求める人材像のハードルが高すぎるかも知れない。大企業のミドルは圧倒的に自分に自信がない方が多く、自分のキャリアを考えてきた方はあまりいない。自覚はしていないが、有する経験やスキルは中小企業では相当活かせる。母集団をつくる際には個人へのアプローチが必要。個人個人に対して、これまでの経験やスキルについて何が生かせるのかというチェックリストがあればよい。

○母集団形成のための有力な一つの手段はやはりリカレント教育である。知識ではないが自己効力感を醸成することは必要か。

○中小企業は、自社の魅力を発信すると同時に、求める人物像もしっかり表現した方がよい。大企業にいる人材は自分の経験やスキルを棚卸ししていないことが多い。求められる人物像がわかれば、自分のどのスキルが使えるかがわかってよい。

○「風穴をあける」とは結局なにをすべきか。従来の働き方よりも「こっちの方が素敵でしょう」と問いかけるべき時期か。様々な単位の自分自身をつくる。インターンができなくてもオンライン上で働きたいりもできる。それらの取り組みを表出化させ、新しい働き方を構築するムーブメントができないか。隣の人がチャレンジをして楽しく仕事ができているならば、自分もチャレンジしてみたいくなる。働き方や活動の単位を多重にしたり複数にしたりした方が素敵だ、ということを理解して欲しいと感じる。

○参考までにだが、「兼業・副業」という言葉で想起するのは「小遣い稼ぎ」という

調査結果が出ている。兼業副業の正しいブランディングが必要。

○兼業・副業はネガティブなイメージだ。「プロボノ」のような表現の方がよい。

○いろんな役割を楽しめる時代になってきたということか。

○コーディネート機関は簡単に育つものではないことは理解頂きたい。単年度だけの取組ではなく、複数年の取組を支援頂きたい。文部科学省の『トビタテ！留学 JAPAN』も地域コーディネーターは必須であり、地域が汗をかく形になっている。複数年の支援ができる形である。

○コーディネーター機能が重要であることは共通認識である。どう活かすかを検討していきたい。

○地域金融機関や大学は、本業の延長線上で中間支援機能が発揮できる。本業へのメリットをどう活かすか等考えながら、掘り起こしをすべきか。本業にとってメリットとなる機能を提案できれば、本機能は拡大するであろう。

以上